

ソーシャルワークと福祉臨床論の展開 I

岡村正幸

〔抄録〕

1970年代における急速なグローバル化と経済的危機の進展以後、財政的赤字を背景に「大きな政府」から「小さな政府」への移行が求められてきた。いわゆる後期近代における「福祉国家の近代化」にどう対応していくのか。社会福祉の社会的機能の見直しが求められている。ここでは2014年ソーシャルワークのグローバル定義の見直しの中、ヨーロッパを中心に語られるソーシャルワークの危機を手がかりに新しい多元的な福祉供給体の位置づけと、そのもとの方法としてのソーシャルワークの機能と手続きについて検証をしてみたい。その際、福祉臨床という視点と立場をとることを通して「福祉臨床論」構築の足がかりとしたい。

キーワード：福祉臨床論 福祉国家の近代化 多元的福祉国家 ソーシャルワーク

はじめに

IFSW（国際ソーシャルワーカー連盟）を軸に国際的に検討されてきたソーシャルワークの定義をめぐり、2014年6月、「Global Definition of The Social Work profession（ソーシャルワークのグローバル定義）」として変更がおこなわれた。それは、1982年さらに2000年、モントリオール総会での定義以後、主としてヨーロッパを中心として提起される「福祉国家の近代化」と呼ばれる福祉国家としての国のあり方や社会福祉サービスの質に対する危機感の広がり中で、改めてその社会的機能に対する問いかけへのひとつの回答という面を色濃く持つものである。

わが国ではそれらを受け、社会福祉専門職団体協議会（以下、社専協）が「ソーシャルワークの多様性と統一性」「先進国の外からの声の反映」「集団的責任の原理」「マクロレベル（政治の）重視」「当事者の力」「ソーシャルワークの専門職の定義」「ソーシャルワークは学問である」「知識ベースの幅広さと当事者関与」「（自然）環境、持続可能な発展」「社会的結束・安定」といった新しい定義を考える国際的視点からの10のポイントを提示し国内的な議論の積み重ねを呼びかけている¹⁾。ここではそれらを踏まえつつ、この間の動向の背景となるソーシャルワークをめぐる危機と論点を歴史的に検証するとともにこれからのソーシャルワークを考えていくために福祉臨床論という視点から整理、検討をしてみたい。

後で触れるが、その際、注意しなければならないのは援助専門職としてのソーシャルワーカーとソーシャルワーカーが仕事で使用する手続き、道具としてのソーシャルワークという概念の多少の混同であり、この点についてはレジームを背景とし、1930年代以後、違いを見せながら発展してきたアメリカとイギリスの必要事態への福祉的介入の手法の違いが強い影響を与

え、一部に混乱を招いている現状があると考えられる。

1. ソーシャルワークの成立と社会福祉の社会的機能について

近代国家の成立は人の自然の束縛からの解放による経済的發展を背景にいわゆる富のさらなる増加とそれらの平等的配分を原発的には目的とする。いわゆる「富の総和の移動に関わる思想と方法」²⁾の変更であり、それは方法としてみれば市場経済という仕組みによる分配か、もしくは当時、理論的には可能とされた計画経済というものが考えられるが、ごく自然的には市場（いちば）における交換という仕組みの發展として自然から切り離された「労働力」の市場（しじょう）における購買という仕組みがアダム・スミスのいう「神の見えざる手」によって予定調和を図る最適なものとしてまず成立する。

しかし周知のように成立した若々しい市場経済はそれほどの時間をへることなくして様々な収奪のための周辺形成と結果としての格差を作り出し³⁾、資源配分における需要と供給の自然な調整による公平であるべき配分の破綻という耐え難い現実を見せはじめることになる。いわゆるサブシステムとしての社会システムからの経済システムの分離による増大する富の調節と配分という、初期コントロールの限界であり結果、その広がりに対して社会的な対応が求められることになる。

そのために取られる基本的な市場経済に対する前期近代での最初の修正的介入は、基本構造の温存を前提に二つの方法をとる。そのひとつが近代社会の基本構造である労働力市場での売り方不備、特に市場経済における最大の危機である失業という事態の回避のための雇用の公的創出、いわゆる、ケインズの完全雇用策というものであり、いまひとつは基本構造への介入策ではないが、イギリスのベヴァリッジ報告にみられるように国家による所得移転をともなった生活破綻の裏支えとしてのセーフティネット（以下 S ネット）の張り巡らし普遍的運用として具体化する。しかしそうしたナショナルミニマムの設定はその運用それ自体が直接的に経済的な生産活動でないが故に国民の同意、承認が必要であり、結果、多くの富とそれを動かすための法制度や機構と人と方法を必要とする所得移転の巨大な富の消費装置でもある。

こうして張り巡らされた修正的介入としての S ネットは「生の営みの困難」⁴⁾の諸側面に対応するものとして前期近代、いわゆる 1970 年代ころまでにはほぼ 7 領域に渡っている。ここで取り上げる修正介入として、「何とか生きる」ことの保障、いわゆる救貧活動に始まりをもつ公的扶助としてのネットの張り巡らしは以後、歴史的にできるだけ日常生活に近く、できるだけきめ細やかさを指向する。それは現在、具体的には次のような 7 領域への広がりとして整理できる。

①安心して食べ続ける ②安心して生み育てる ③安心して健康であり続ける ④安心して住み続ける ⑤安心して学び続ける ⑥安心して働き続ける ⑦安心して老いる

こうしてもともと何らかの社会的な要因をもつ多様な「格差」といったことの広がりに対す

る社会的対応、つまり修正というシステムへの介入として立ち上がった社会福祉という試みは時代の要請に強く規定されながら、実はその中に二つの方向の社会的機能を内在させてきた。その一つは格差の個別表現としての人とその暮らし、生の営みに対し人に向かう直接的な機能であり、いまひとつは格差という社会的な事象の改善に対し国へ向かう機能である。こうした二つの社会的機能は本来一体的なものであるが、歴史が証明するようにどちらかといえば社会の若さが可能とした労働市場参加におけるチャンスの均等化への指向を前提に前者の形を強く取り入れたものが、いわゆるソーシャルワークという方法であり、アメリカを中心にそれはやや「楽観的な人への期待」を前提として成立する。いまひとつの機能はいわゆる歴史的な歩みによる市場としての国内外での周辺の不在の中、労働市場の制度疲労や閉塞感のもと、個の可能性でなく逆にこれもまたやや「楽観的な国の役割に関する期待」のもとに形成される福祉国家というものであり、イギリス、ヨーロッパを中心に発展することになる。

こうした近代社会の方法に対する修正としての政策的介入はすでにふれたように近代社会のもつ基本的な市場主義経済の構造を温存しつつ市場への介入と、そこからの逸脱に対する受け止めとしてすでに触れたような幾つかのSネットとして張り巡らされる。もちろんこれらの仕組みは、歴史的には国が認めるしたがって国民が容認する最低限度の生の営みの確保のために、ただし予防的ではなく事後的な受け止め策として、つまりSネットによる保護の提供によってそれ以下にしないという理念のものにと援助専門職の配置を伴いながら運用されることになる。

かつて、こうした社会福祉の現実について次のように指摘した。「歴史的・社会的仕組みとして、したがって国民、言い換えれば想定される市民像の承認を必要とするシステム実態をもった社会福祉は、政策とその裏付けとしての財政によって実体化する法律や制度、サービスの管理・運営機構である組織や法令、どのような人であるかも含む人の配置などによる社会福祉供給システムを前提にそのもとにおける多様な社会福祉援助活動によって人々の暮らしに具体的な関わりを作り出してきた。したがって国民がこうした装置をどのような状態になったときに、いかなる方法で利用できるかといったこととも歴史的に形成されかつ承認され変化していくものである。」⁵⁾

こうしてさまざまな国による修正的介入は、周知のようにエスピン・アンデルセンによれば脱商品化、脱階層化の指標をもとに幾つかの類型化が可能とする。同様に岡田によればレジームによる違いはあるものの次のような共通する条件を備えているとする⁶⁾。

それは①最低生活の保障を基盤とする社会保障制度の発達。②労働力需要の均一化によってほぼケインズの完全雇用が確立している。③それらを可能とする一定の経済発展とそれが混合経済体制であること。④社会権の確立と民主主義体制であること。⑤税制策をはじめとして所得再分配等による国民生活の均等化、平等化がはかられていること。

1970年代まで続くこうした市場経済体制への雇用と福祉を軸とした修正は一定の成果を作

り出しいわゆる福祉国家の成立とその運用者としてのソーシャルワーカーの存在として前期近代を形成する。それは社会システムから分離した経済システムがその成果を十分に社会システムの返しきれないことによる政治システムの分離を一層際立たせ、いわゆる政治システムの経済システムに対する「規制」といったものとして具現化するものである。

それをソーシャルワーカーのレベルで整理するとこの時期のイギリスにおけるソーシャルワーカーについてハリス (Harris) の論を紹介しつつ伊藤は「福祉を実践・提供しながら、クライアントと社会をつなぎ合わせ、彼らの市民権を擁護しつつ「社会統合」を果たすための役割を担う、実質的な自律性と裁量権を保持する福祉官僚専門職 (bureau-professional) として存在してきた。」⁷⁾とする。

これはまさに前期近代における福祉国家のもとでのソーシャルワーカー像でありその社会的機能を指摘するものといえる。

2. 前期近代の混迷と福祉国家の近代化論について

1970年代までの高度経済成長にみられるような経済発展を財政の基盤とする前期近代の福祉的介入は、近代がそれまでに遭遇したことのないような大量生産大量消費による経済的発展のものとの完全雇用とナショナルミニマムとして国家レベルにおいてもまた、個別の利用においてもさらなる S ネットの張り巡らしとその利用において普遍主義的ミニマムの保証を実現したともいえる。結果、それは経済成長そのものを消費する巨大なシステムとして国民の前に立ち現れ、その運用に当たる専門職の権力とともにやがてそれ自身が社会的な負担になっていく。

そのため脱工業化やそのもとでの労働市場の多様化、脱工業化や経済のグローバリゼーションの急速な進展や人口構造の変容などのもと、1970年代後半から1980年代にいたる二度の石油ショックを契機とした経済的停滞は、先進国を中心に高度経済成長の急速な減速と、その結果としてインフレーションや失業の深刻化とともに、そのことが逆に福祉的介入の必要性を作り出すことになり、自身の仕組みにより、結果、社会的支出の増大を招き、一層の財政危機を作り出すというパラドクスと向き合うことになる。

例えば福祉国家として市民生活に必要不可欠なものとしてこの時期、もっとも大きな社会福祉・社会保障サービスを具体化していたイギリスではそのあり方をめぐり、国民の離反を前にサッチャーの反福祉国家政策を掲げた保守党政権の登場をみる。サッチャーの率いる保守党は「市場の自由競争原理を導入し、選択の自由、国民の自助・自立精神の強化とともに、社会保障費縮減や社会保険における所得比例給付部分の廃止など」⁸⁾といった一連の政策を相次いで実施しいわゆる福祉国家の空洞化を推し進めて行くことになる。

こうした急速な福祉国家の揺らぎは結果、アメリカのレーガンも含め、レジームによる違いを見せつつも国際的にいわゆる所得移転という富の移動を伴った国家による国民生活に対する

ナショナルミニマム保障のための「大きな政府」を否定し、市場に力を取り戻し、国民に一定の自覚と義務を課す「小さな政府」へと大きな舵をきることになっていく。以後、この反ケインズの政策はスタグフレーションの進展とともに多くの国において猛威をふるうことになる。

こうした事態への典型的な対応策としてイギリスにおけるサッチャーとその後にとられた政策としてのサッチャーリズムと引き続く、ニューレイバー、Tブレア政権後の第3の道とも呼ばれる変則的な新保守主義的としての変容がある。これはやや複雑なレジームをみせるが、基本的には自由主義的な政策への回帰であり、それまでに従来の労働党がとってきた政策原理とは背反する志向を見せるものである。サッチャーの前期近代の修正的介入であるナショナルミニマム堅持の社会政策への攻撃はまずあらゆる社会サービスの市場化政策として具現化する。

島田によればそれは「ケインズ主義的福祉国家を巡る戦後合意からの離脱の表明であり、市場主義的福祉国家という新しいコンセプトが形成しつつある」⁹⁾であるとするが、それは結果、本来異質な市場主義と福祉国家の混合という新しいコンセプトの形成に進むことになる。

その契機となったもののひとつは1988年、グリフィス・リポート（Griffiths Report）によって提起された福祉サービスの効率化としての手法、いわゆるケアマネジメントという援助における新たな怪物の登場であり、それはやがて1990年、その後の英国社会福祉の基盤の一つとなる「国民保健及びサービス及びコミュニティケア法」の成立に大きな影響を与えることになる。

ここではナショナルミニマムであった社会福祉サービスにおいてサービス提供者と利用者が明確に区分され、その効率的運用が追及されることになる。訓覇はこうしたこの時期の一連の福祉国家の批判について「一言に福祉国家批判といっても、1970年代を要約すると、2つの論題あるいは観点が継続して指摘される。1つは、公共事業は経済的に非効率であるため、国家は社会サービスの生産を民間市場に譲るべきであるという、福祉国家の効率性の問題であった。もう1つは、福祉国家は過大な権力を持つ官僚機構と化し、市民の社会福祉に関わる自己決定権を侵害するようになったという、福祉国家の正当性の問題である。」¹⁰⁾とする。つまり市場経済体制を基本構造とした前期近代における修正的介入策である福祉国家体制の行き詰まりが大きな声となってその存在を揺るがすことになっていく。

例えばそのことは社会福祉サービス利用者の絞り込みや限定化、さらに社会福祉制度の経済施策への寄与、また制度の一層の効率化などを柱とするファウラー改革などによって一層現実化していくことになる。

結果、こうした批判を踏まえた福祉の社会的機能の一つである福祉国家的修正の再度の見直しはそのもとで制度、サービスの運用にあたる援助専門職としてのソーシャルワーカーの仕事にも大きな影響を与えることになる。そこにソーシャルワークとは何かという問いかけが専門職自身にもまた社会の側に生まれてくる。

イギリスのソーシャルワーカーがどちらかといえば仕事の手続き、方法への関心よりは専門職としての立場や機能に強いこだわりをもってきたという歴史があり、この点は2003年、クリス・ジョーンズらによる、ソーシャルワークと社会正義－信頼と尊敬を基盤とする新しい確かな実践への一宣言と題するソーシャルワーク・マニフェストにおいても明確に指摘されている。このレポートはその出だしで「今日、イギリスのソーシャルワークはその方向性を見失ってしまった。これは新しい出来事ではない。ここ30年間以上にわたって多くの人々が、ソーシャルワークが危機の状態であることを語ってきた。」¹¹⁾と述べることの背景でもある。

つまり「その代わりに、現在の我々の仕事は、マネジメント主義 (managerialism)－サービスの断片化、財政的な制約や資源の不足、増大する官僚主義的な作業負荷、圧倒的なケアマネジメント・アプローチの横溢とそれに付随したパフォーマンスの指標化、プライベート・セクターを使用することなどによって形作られている。」¹¹⁾

こうしたことを通して、急速に進む「設計・運用・修正の相互化・多様化」や「需要・供給サイドの多元化、相互侵食・依存」といったことも含めて、社会福祉の変化は日常的にはいわゆるソーシャルワーカーの「仕事」の場面で社会における批判を背景に、具体的集中的に表現されることになる¹²⁾。

3. 福祉援助専門職としてのソーシャルワーカーとその危機

1980年代のはじめ、当時現地の医療センターにいた私は、間近に専門職集団としてのセンターのソーシャルワーカー達が職業として強い危機感を持ち、かつサッチャーの矢継ぎ早に打ち出されるサービスの民営化やさまざまなプライバタリゼーションに対して批判的であったことをよく覚えている。彼らは総じて方法としてのソーシャルワークに関する圧力よりはソーシャルワーカーとしての職業の権限の強化、例えばソーシャルワーカーが抑圧者の位置において振る舞うという社会からの批判を感じており、判断の決定者でありいわゆる福祉国家の運用者として財政的にも権限としても「振り子が振れすぎた」と呼ばれる現象とその反動にたいする警戒感と言ったものであったように思う。

それらは1970年代までの所得移転を方法とし、普遍的利用を前提としたSネットの張り巡らしと「ゆりかごから墓場まで」を目標に発展してきた福祉国家の行き詰まりの中、財政的にも効率性の面においても指摘され、一方で激動する世界情勢のもと、特に中東マネーの暴発の流れ込みによる市民の暮らしの不安定化や社会不安の増大に専門職としても有効な手立てを持ちきれないということにおいて批判の対象となっていた。

この点はこの間の英国の状況のもと援助専門職としてのソーシャルワーカーがこうした事態にどのように対応するか、ソーシャルワークの方法というよりも専門職集団としての立ち位置を問われることになっていく。

例えばイギリスのこの関の事情に関して伊藤は2003年クリス・ジョーンズ他による「ソー

「ソーシャルワークマニフェスト」を翻訳し解説する中で幾つかの重要な指摘をしている¹³⁾。
マニフェストではイギリスにおけるラディカルソーシャルワーク実践の一系譜という副題でこの間のソーシャルワーカーの間に拡がる危機について「ソーシャルワークは「公的な課題（public issues）」と「個の私的な困難（private troubles）」との間に横たわる関係性を理解しようとするものであるし、その双方を扱おうとするものなのだ。権力者の多くが、われわれの社会において多くの普通の人々を閉じ込めている惨めさや諸困難に注意を向けることができなくなっているソーシャルワーカーを、打ちのめされ意気消沈させられたそれとして見ることを喜びとするのは、この理由のためなのだ。この関係性を理解することによってのみ、ソーシャルワークは闘うべきものとして存在することを意味するようになるのである。・・・今日、イギリスのソーシャルワークはその方向性を見失ってしまった。これは新しい出来事ではない。・・・もはや容認しがたいものとなっている・・・」と指摘する¹³⁾。

したがってその危機の行方について、社会正義の実現のための仕事からいまや「その代わりに、現在のわれわれの仕事は、マネジメント主義（managerialism）サービスの断片化、財政的な制約や資源の不足、増大する官僚主義的な作業負荷、圧倒的なケアマネジメント・アプローチの横溢とそれに付随したパフォーマンスの指標化、プライベート・セクターを使用することなど」によって形作られるようになっている。

こうした社会福祉とソーシャルワーカーを巡る危機は実はわが国においても同様に進行する。例えば1990年からの10年間にいて取り組まれたいわゆる社会福祉基礎構造改革や運用者規定でもある資格制度導入などを含む90年代改革は1990年福祉八法改正から始まり計画福祉行政の進展や特定非営利活動促進法（NPO法）の制定など幾つかの重要な法制度改変を経て、2000年社会福祉法の制定さらに介護保険制度の新設によって具体化する。

実はわが国のこの改革には2つの軸がある。その一つはサービスの提供の供給舞台を国から身近で、ローカルを反映できる基礎自治体へ移設するというものでありこれは分権化として進められた。いまひとつは社会福祉事業法による供給体そのものへ参加の規制を取り払い企業や非営利・第3セクターを含むさまざまな組織や事業体による多元的なものによって構成するというもので、これは、いわゆる利用における市民の新しい義務を伴いつついわゆる規制緩和として実施される。

これにはすでに触れた訓覇のいう福祉国家に対する「正当性批判」や「効率性批判」が色濃く反映している。したがってこの改革の試金石として2000年、高齢者分野における介護保険法が導入されわが国での社会福祉サービス供給体制多元化とマネジメント制の導入による利用方法に関する新しい時代が始まることになると結果、社会福祉の現場とソーシャルワーカーの仕事は大きな変更を迫られることになった。

効率化のもとでの雇用環境の流動化や不安定化、サービス受給の決定のためのソーシャルワークにおける専門的判断の抑制とケアマネジメントの導入、さらに多様な事業参加者による福

祉サービスの急速な市場化が進むとともに、そのもとで反面的な自立論によってサービス制限や利用者の絞り込みとともに新たな義務としての自己責任化といったことが急速に進んでいく。

こうして国際的に進む S ネットの見直しとともに供給体制の多元化と公共性の縮小を目指す福祉国家の近代化は国の機能を外交や治安といった領域に限定するとともに、福祉サービスにおける利用者義務の強化や福祉供給体の一層の効率化を求め、さらに供給体そのものにおけるいわゆる公共の見直しと企業を含む第3セクターや非営利組織とともに多様な参加者によって複合的な供給体を通し競争的なサービスの見直しそのものを求めることになる。結果、こうした改革の推進は社会福祉の歴史的の中で豊かに蓄積されてきた社会的機能についての限定化と見直しを進めることを通してソーシャルワーカーの位置づけに大きな変容を求めることになってくる。

4. 福祉臨床論としてのソーシャルワークの再編について

すでにふれたようにまずサービスの総量をあらかじめ規制するとともに、サービス供給体に競争と市場化による多元化を進め、かつ利用にあたって負担と制限を設けるといった改革の方向は、歴史的に形成されてきた社会福祉の一体的でかつ二つの社会的機能について大きな変容を迫るものになっている。このことは援助専門職の国家資格制度とその教育内容にも関わる重要な問題である。ここではまず、福祉臨床論の構築への手がかりとしてこうした危機に対する福祉臨床論からの一定の異議申し立てをおこなってみたい。

(1) 福祉臨床

もちろん社会福祉における実践や援助といったことを福祉臨床論として整理、検討することはそれほど蓄積されているわけではないが、ここでは窪田の臨床論を手がかりとして考えてみたい。窪田は最後になったその著のタイトルを「福祉援助の臨床－共感する他者として」とした。これには60年以上に及ぶ実践と教育・研究からくる福祉実践の哲学ともいえる大きなメッセージが込められている。またその前作業として長野大学で「社会福祉の臨床研究－その意義と可能性」¹⁴⁾という注目すべき講演を行っている。その中で、臨床というものの考え方について「臨床というものをどう考えるか、という、相手との相互的な交流の中で、いいかえれば相互的な関係性のなかで新しい認識を蓄えながら、それに沿って次の行動を決めていくという形で行われるもの」だとする。実にその場を大切にしつつ、基底における人の理解を深めながらいわゆる生ものとしての把握である。例えばこうした点に関し内田はレヴィ・ストロースの「ブリコラージュ」を引き合いに出しながら、臨床は「今そこにある現実手持ちの材料で、手持ちの人員、手持ちの情報、手持ちの時間で対処しなければならない。・・・それはまさに目の前にあるものの潜在的可能性をつねに考慮してく。』¹⁵⁾ものでなければならないとする。

つまり自然とは常にわけのわからない現象の宝庫であり、だからこそ生ものであるとする。生ものであるからこそ、あらかじめ用意された回答や、マニュアルの適用や当てはめ、修理といった問題可決型アプローチという立場をとることはない。

したがって窪田は福祉援助に臨床という視点を取り入れることで「臨床という認識の仕方、すなわち、対象の多義性を十分に考慮しながら、それとの交流の中で事象をとらえるという認識の仕方が基本であることを意識しつつ、相手との交流と関係の相互性をその特徴とする認識の仕方である、という主張を軸とすることを意識して、ソーシャルワーカーの働きを具体的に描写することができるようになる。・・・」とする。ここには生き生きとした「そこにあるもの」からの柔軟でしかし緊迫した思考が大切になる。あらかじめ整理、想定され用意された回路の適用や組み合わせではない臨床という視点の大切さがある¹⁶⁾。この点に関しては、たとえば社会資源を実践的前提として有限とみるか無限とみるかといったソーシャルワークにとって重要な論点にも関わっている。

そうしたことを踏まえつつ、またこうした一連の作業をまえに大学院で教えを受けた稲沢はその著を読み解くための窪田臨床論の重要な手がかりとして4つのキーワードを取り上げている。それらも参考にしながら、これまでに検討してきた社会福祉やソーシャルワークの危機に対しどのような意見をもちうるのか検証をしてみたい。

(2) 援助関係

稲沢は窪田の臨床論の中で、援助を援助たらしめているもの、根底で支える基盤としてまず、「援助関係」を取り上げる。

援助関係はソーシャルワークが蓄積してきた重要な要件を構成する。窪田は援助関係について「援助専門職の担う援助において、援助を援助たらしめているもの、援助を成立させているものは、クライアントと専門援助者の間に成立している援助関係である。援助関係の存在が「相談」を、友人知人や親戚からの助言や支えと並んで、しかし質的に異なるものとして、利用者の生の営みの困難への対処を支え、その援助を個人的な信頼や利害関係から区別するのである。」とする¹⁷⁾。

この点に関し、例えば稲沢はそのことだけで社会福祉の援助を語ることが出来ないとしつつも注意深くではあるがフロイトやロジャースを引き合いに、クライアントが持つ内在的な力、例えばそれぞれに無人格と透明になることという前提の違いはあるが「内在力（フロイト）・ポジティブな力（ロジャース）」について、クライアントが決して援助者の「思いのままにコントロールできるような存在ではないこと、それは、苦悩し、困惑しながらも、にもかかわらず、自らの欲動を抱え、曖昧ながらあるいは明確な意志をもち、場合によっては、援助関係を逸脱したり、破壊する力も有し、だからこそ逆に、自らの成長をも可能にしていくある種の力をもっている一人の人間であることを繰り返し実感させられてきた」と指摘している¹⁸⁾。

稲沢が「無力さを有する関係性」とよびそれは援助者が「重すぎる苦しみを背負う人のかたわらにとどまる決意と引き換えにこそ現出する」関係性に注目していることもそうした重要な指摘といえるものである。

すでに検討してきたように福祉国家の近代化に対する後期近代の新しい再修正的介入における福祉サービスの位置づけは、こうした援助関係の有り様を受け入れることが出来ない。例えば、あらかじめ決められたサービス量からくる専門的判断の抑制や制限、また援助のプロセスにおいて問題と解決が相互の関係の中に閉じ込められ、背後の社会が消え二者間問題に変容してしまう。あたかもソーシャルワークの次なるモデルがケアマネジメントによりすべてであるかのような議論にはマネジメントの有益な位置づけからも与することは出来ない。

(3) 共同作業

次に取り上げるのは「共同作業」という援助プロセスにおける相互性であり、それは相手の力の参加と援助者の人格の参加という共同のステップとしてのとらえ方である。この点に関して窪田は援助において援助関係が共同であることを終始意識しつつ展開することが極めて重要であるとする。したがって「援助を、援助者と被援助者との共同作業であるとするものの根拠は、いかなる援助も、それを使う人間の「利用者」としての参加がなくてはそもそも援助にならない、という単純な事実による。」

この点で、識字教育を舞台とするが、つぎのような P. フレイレの指摘は利用者、対面する人をどのような存在として捉えるかという点においてソーシャルワークにとっても重要なものと考えられる。「人間化の問題に関心をもつと、ひとはただちに、存在論的可能性としてだけではなく、歴史的現実として非人間化の実相を認めざるをえない。人は非人間化の程度をやるにおよんで、人間化ははたして実現可能であろうか、と自問する。」そして「銀行型の理論と実践は静止させ固定化する力であり、人間を歴史的存在として認めさせることができない。課題提起教育の理論と実践は、人間の歴史性を出発の原点とする。課題提起教育は、何ものかになりつつある BECOMING 過程の存在として、すなわち、同様に未完成である現実のなかの、現実とともにある未完成で未完了な存在として、人間を肯定する。実際、未完成である歴史をもたない他の動物とは対照的に、人間は自分自身が未完成であることを知っている。かれは自分の不完全さに気づいている。この不完全さとそのことの自覚こそ、人間だけの表現としての教育の根がある。」したがって教育活動は「それは予言的であり、だからこそ希望にあふれ、人間の歴史的本性に合致する。かくしてそれは、人間を、自分自身を乗り越え、前進し、前方をみつめる存在として肯定する。」¹⁹⁾

だからこそソーシャルワークは相互の参加による共同の作業として進められていくことで力を持ちうるものであり、そのことを通してまた相互に変化を獲得していくものである。

後期近代で推し進められ福祉の変容が基盤とする人のとらえ方、利用者の位置づけはこうし

た援助哲学ともいえる人の持つ可能性やそれを具現化する方法を内包していないどころか、敵対的でもある。

（4）共感する他者

さて次に取り上げるのは「共感する他者」という関係性と相互理解と援助者の立ち位置である。窪田はクライアントが私のとどかない領域をもつ人であることに敬意を表しつつ「自分の話を共感を持って聴いている相手がいるとき、「語る側」は相手の態度のなかに自分への共感を感じるとともに、その相手が、その共感のなかで同時に他者であること、自分の話を共感を持って聴きながらも彼は彼自身の立場を持ち、自分なりの考えをもっている存在だと感じてもある」という理解の重要性であると極めて重要な指摘をしている。ソーシャルワークを関係性で理解するときに援助者の立ち位置は揺らぎやすくこの点の整理は共感という魅力的だが誤解されやすい概念の整理が強く求められる。

また窪田はソーシャルワークが取り扱う対象について、19世紀以後、長い歴史の中で、やっと今日一般的には Person in situation（状況における個人）として理解することに落ち着いたとする。またそのことが問題をもつ個人ではなく個人の生きるそのものであるという極めて重要な転化であることを指摘している。これは例えばソーシャルワークの成立の大きな役割を果たした COS（慈善組織協会）における友愛訪問での訪問員の対象者理解が救済カードに記されるように「賢者の愚者に対する施し」であったことを考えればリッチモンドの「社会診断」をへて歴史の中ではぐくまれてきた後退を許されない視点だということができる。がしかし、現在の福祉見直しにおいては語られる人の理解と援助の哲学はこうしたことと向き合うことなくこうしたことを決して引き返せない前提として捉えていない。

終わりに－福祉臨床論の構築に向けて

この作業は本来、新しい福祉臨床論の構築への試みのひとつであるが、今回は現在進みつつある福祉国家の近代化に対する後期近代の再修正が福祉国家とソーシャルワークに与えているダメージについて考えることを通して逆に、福祉臨床論の基底について考える機会とした。

私的な経験から書く。1970年代、私はある職場で先輩ワーカーから仕事の引き継ぎを受けていた。凡そ300ケースほどの記録を前に、先輩ワーカーはそれぞれの関わりと「今」とその背景、判断について説明をしてくれた。そしてその今についてこれから何が想定され、残された課題とだから何をすべきかについて彼女の考えを手短かに話してくれた。その記録は援助者がみた、利用者の物語であり、援助者の行った仕事の内容である。考えれば今と違い記録の開示、アカウントビリティといったことが想定されていない時代に、援助者が描く利用者の物語が利用者自らによって点検され修正されるということではなかった。その関わりがそれから続く利用者の物語にとってどのような意味をもったのかについては吟味されていない。しかし、

考えれば私たちは当事者である彼、彼女の生きる物語のある時期にその対処能力を前に登場した人物に過ぎないし、いつかはその物語の中から退場する人物であることに違いない。だから私たちは共感する他者として寄り添うのでもなく、援助は主訴として語られるいまを出発としその連続の中の彼、彼女の対処能力への問いかけを軸に新しい経験として物語の中で積み上げられていくことになる。

時代は同じ頃、イタリア、トリエステのサン・ジョヴァンニ精神病院の長期慢性女性病棟カメリアにおいて一つの試みが始まっていた。それは彼女らの個人史を再現する患者の「再歴史化する」という困難な取り組みである²⁰⁾。そこではさまざまな人々が病院全体からまた専門職からも忘れられ受け入れ不能なものとして無理やり移され無関心の中にそれぞれの生きるがあった。脱病院化であるトリエステ改革の原点ともいわれるこの取り組みはそれぞれのカルテ数行に表現される人生から、徹底した面接と対話を通して一人一人の生きるを受け止め、かつ全人的理解を深めそれぞれに自らを「再歴史化」すること、そのことが彼女のつながりの中でその後の生きるの出発点になり、だからこそ物語の主人公であることを取り戻すという困難な試みであった。これらは効率化やマネジメントといったことを超えた時間と判断の専門的自由の必要性を強く考えさせられるものである。

これらには窪田が言う「生の営みの困難」への専門職の取り組みの共通した援助哲学がある。こうした歴史が教えることは社会福祉における労働はその対象が人であることによって大きな特徴を有している。そこでの仕事はだからこそ人格の参加を含む相互的労働であり、したがって相互の人間関係の結び方が極めて重要な意味を持ってくる。そこでは労働能力とともに援助専門職のもつ価値や倫理、さらに人権への理解といったことが重要な意味をもってくることになる。したがって、福祉の形成過程に関する歴史認識や人への理解を含むより広い社会認識といったことが極めて重要なものになり、具体的な仕事を形作ることになる。

しかもこの過程において用いられるいわゆる労働手段の比重は、最近の移動や伝達、さらに身体的代行といった分野における福祉工学や医学、さらにコンピューターの飛躍的な発展といったことが大きな可能性をもたらすとしても、価値や規範、倫理や知識、さらに専門的技術といった階層的力量としての労働力のもつ意味に比して、それほど減ずることはない。さらにこうした過程を通して働きかけ、改善する過程において、内在的なものを含む相手の力の発見や開発に依拠することなく目的を達成することのない仕事である。

この点は1987年わが国で社会福祉専門職教育が、資格制度として導入以後、いわゆるソーシャルワーカー教育におけるソーシャルワーク教育の抱え込みといった現実の中での幾つかの困難の背景でもある。

窪田は「現代社会において、貧困問題を全面的に解決することはおそらく不可能である。各種の社会問題についても同じであろう」とし「・・・この種の状況認識においても現実的かつ、かなりの程度悲観的である。しかし、その中でも人は生きていかなければならない。しか

し、ひとは全力を挙げて生の困難を超えて、生命をつないでいく。」だからこそ、「常に希望と期待を語ることをやめない・・・」そして、「人が人である事の優れた証は、新しい事態やそれまでの知恵では及ばない出来事に直面したときに、積み重ねてきた過去の記憶、工夫と力のすべてを総合しつつ、さらに新しい知恵と力を加えてそれを乗り越えることが可能だという前提に立って、物語る事である。文明はそのような人の能力の中から創られてきた。」という。

もちろん気をつけなければならないのは、ここで取り上げた福祉国家の近代化という中で準備、実行されている再修正としての新しい介入は歴史の否定といった側面ばかりではない。一面で、ソーシャルキャピタルとして議論される地域社会におけるつながりと役割の創造とともに、新しい義務をもつ市民像を前提に第3セクター、非営利等の混合する供給体制への可能性を探り、多元的福祉国家として、新しいサービスのあり方を作り出しているという現実もある。

また、ここ数年、こうしたソーシャルワークの抱える課題を考える上で大きな意味をもつ実践や背景としての理論に出会うことにもなった。別の論とするが例えばその一つはフィンランドラップランド地方における「急性期精神病における開かれた対話によるアプローチ（Open Dialogues Approach in Acute Psychosis）」いわゆるオープンダイアログやオランダの寛容と合理主義を背景とした合意形成システムとしてのマントルケア、さらにイタリア精神科医療における24時間、アウトリーチ居宅型ケアシステム、また日本ではたとえば北海道浦河町におけるベテルの当事者研究などといったことはある意味でこうした時代のもつ危機感とだからこそ新しい実践哲学への問いかけという意味において対話を巡る共通した内容を含んでいると考えられる。

私たちは歴史的に確かめられ、蓄積し譲ることの出来ない福祉の価値や倫理、また危機を乗り越えていく創造的な取り組みに学びながら、すでにふれてきたようなその根幹になるものとしての福祉臨床論を構築していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 社会福祉専門職団体協議会（社専教） IFCW（国際ソーシャルワーカー連盟）の「ソーシャルワークのグローバル定義」新しい定義案を考える10のポイント 2015
- 2) 歴史的な発展における近代社会の成立と発展をサブシステムの分離の視点から次のもので検証、整理した、拙稿「社会福祉における方法・援助とは何か」岡村他編著『社会福祉方法原論』法律文化社 1997.5 25-26
- 3) 水野は資本主義の発展の歴史的整理を重層的に分析し、その中で初期資本主義の経済発展と収奪のシステムにおいて周辺の開発という視点の重要性について指摘している。水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社新書 2014.7
- 4) 窪田は福祉援助の対象として「生の営みの困難」という新たな提案をしている。特に記載がない場合以

- 後の窪田の引用等は同書による。窪田暁子『福祉援助の臨床 共感する他者として』誠信書房 2013.1
- 5) 拙稿(1977) 同上 26-27
 - 6) 岡田藤太郎 福祉国家と福祉社会 相川書房 1984
 - 7) 伊藤はイギリスを中心としたソーシャルワークの現状を紹介しつつ、危機の背景について積極的な紹介をしている。伊藤文夫「包摂の実践者か、排除の先兵か？」日本福祉大学研究紀要-現代と文化 第113号 2006.3 125-126
 - 8) 訓覇は福祉国家の近代化論を取りあげながら、主にスウェーデンの検証を通して多元的福祉国家の可能性を論じている。その際、前期近代の福祉国家的修正への批判としてこの点を紹介している。訓覇法子『福祉社会システム論』法律文化社 2001.12
 - 9) 島田幸典 イギリス「自由主義」レジームの変容と維持 新川敏光編『福祉レジーム』ミネルヴァ書房 2015.11 126
 - 10) 訓覇法子(2001) 同上
 - 11) 伊藤文人「ソーシャルワーク・マニフェスト」日本福祉大学社会福祉論集 第116号 2007.3
 - 12) 急速に進みつつある福祉サービスにおける供給、需要のボーダレス化、多様化について次のもので取り上げた。拙稿 社会福祉の実践と方法『総合演習』ミネルヴァ書房 2004
 - 13) 伊藤文人(2007) 同上
 - 14) 講演録であるが後の福祉臨床論への整理として幾つかの重要な論点を取り上げられている。窪田暁子「社会福祉の臨床研究」長野大学紀要 特別号第1号 2009
 - 15) 内田樹『最終講義』文藝春秋 2015 210
 - 16) 稲沢公一「窪田援助論のキーワード」医療ソーシャルワーク 東京医療社会事業協会 第63号 2015
 - 17) 稲沢他『援助するということ』有斐閣 2002
 - 18) 稲沢公一(2015) 同上
 - 19) パウロ・フレイレ、小沢有作訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房 1979
 - 20) S・シュミット、半田文穂訳『自由こそ治療だ』悠久書房 1985

参考文献

- 山森亮 書評「ソーシャルワークの復権：新自由主義への挑戦と社会正義」海外社会保障研究 国立社会保障・人口問題研究所 No 182 2013
- 藤原章生『資本主義の終わりの始まり』新潮社 2012
- 宮嶋淳「国際ソーシャルワークの動向とわが国の課題」中部学院大学・中部学院短期大学部 研究紀要第10号 2009
- 稲沢公一 岩崎晋也『社会福祉をつかむ』有斐閣 2008
- 花田昌宣「福祉国家の変容とソーシャルワークの課題上」社会関係研究 第12巻第2号 2007.3
- 田川佳代子「ソーシャルワークの価値と倫理をめぐる諸問題」愛知県立大学文学部論集(社会福祉学科編)

第53号 2004

隅広静子「クリティカル・ソーシャルワークにおける「クリティカル」概念の整理の試み」福祉県立大学論集 第34号 2010.2

日本学術会議「ソーシャルワークが展開できる社会システムづくりへの提案」2003.6

A. エバース他篇 内山哲朗他訳『欧州サードセクター』日本経済評論社 2007.6

統合失調症のひろば編集部編『中井久夫の臨床作法』こころの科学 2015.9

四宮鉄男『とても普通の人たち』北海道新聞社 2002

稲沢公一『援助者が臨床に踏みとどまるとき』誠信書房 2015.9

ジョック・ヤング, 木下他訳 後期近代の眩暈 青土社 2008

齋藤環『オープンダイアログと何か』医学書院 2015.7

向谷地生良『技法以前』医学書院 2009

白石裕子他「ナラティブ・アプローチの視点からとらえた浦河べてるの家における実践の意味」精神科看護 Vol.41. No 6 2014.6

岡本民夫「ソーシャルワークにおける援助論の歴史とその継承」ソーシャルワーク学会誌 第30号 45-54 2015

三野宏治「対人援助関係における専門家の権力性に関する考察」対人援助学研究 Vol.1 1-10

宮嶋淳「国際ソーシャルワークの動向とわが国の課題」中部学院大学研究紀要第10号 2009

穴戸明美「ソーシャルワークにおける「社会的排除」の課題」名古屋学院大学論集 社会科学篇 第45号 2009.3

レスリー・マーゴリン ソーシャルワークの社会的構築『優しさの名のもとに』中河伸俊他訳 明石書店 2003.3

シーラ・マクナミー他 ナラティブ・セラピー『社会構成主義の実践』金剛出版 1997.12

田川佳代子「社会正義とソーシャルワーク倫理に関する一考察」社会福祉学 第56巻第2号 2005

エリザベス・ベック他『ソーシャルワークと修復的正義』林浩康監訳 明石書店 2012.12

小山聡子『援助者教育と物語』生活書院 2014.3

Haris, J. The Social work Business London Sage 2003

川田譽音「臨床福祉へのエンパワーメントアプローチ」龍谷大学社会学部紀要第40号 2012.3

Midgley, J Issues in international social work. Journal of Social Work, 1(1) 2001

稲沢公一『援助者が臨床に踏みとどまるとき』誠信書房 2015.9

付 記

本研究は、科学研究費助成事業 基礎研究（C）平成24年度～26年度 研究課題「精神障害者の再定住化とエリア形成に関する実証研究」課題番号24530756の研究成果の一部である。

（おかむら まさゆき 社会福祉学部）

